ともしび
1994.2
第15号
大学婦人協会東京支部

●セミナー調査報告［ボランティア活動と高齢社会］
●木版画の世界

'93セミナー報告

恒例の全国セミナーが九月二十五日、二十六日の二日にわたって千葉幕張の海外職業訓練センター（OVTA）に於いて、全国からおよそ二百名の参加者のもとに開催された。テーマは「改めて高齢者問題を考える」。

東京支部はセミナー実行委員として本部に協力するとともに、福祉委員会と共同で「ボランティア活動と高齢社会―ボランティア活動に関する会員の意識と実態調査」と題して研究発表に参加する事になり会員の方々に協力頂いたアンケート調査のデータ作り、パソコン入力を行った。

二十五日午後、福祉委員会は奥原さん、当支部は駒木さんが発表し、充実した内容と好評を得た。続いて「高齢者と介護」のテーマで、シンポジウムが行われた。講師は、樋口恵子、高橋泰・大湾知子の諸氏。

懇親会場は幕張メッセに移り、神奈川支部の担当で、華麗な日本舞踊等を楽しみながら一夕を過ごした。

二十六日の分科会は、1「くらし」2「家族・地域」3「ボランティア」4「教育」に分かれた。会員各自にとって切実なテーマであるだけに、熱心に意見が交わされ、全体討議を経て無事閉会となった。東京支部のまとめは次頁を御覧頂きたい。

（磯村明子）

講演二題

好評だった三月の最高裁見学（設計者によるレクチャー付き）に続き清水建設株式会社で活躍中の二人の建築家のお話を伺う機会に恵まれた。（6／16）

①ファッションとしての建築

設計本部建築設計部長岡田宏氏

建築にも衣服と同様ファッションがあり、その基本は衣服と同様気候や風土であり、その土地に適合したものが生まれた。これが建築素材や技術の導入によって大きく変化発達したとのこと。更には情報の発達も建物を変えたが、よい伝統はその中にもずっと生き続けているということを、スライドを使って古くはロマネスク様式から、ローマのものに近いとされる現代のポストモダンに至る建築様式について解説して頂いた。世界各地を自由に旅できる今日、このお話を頭に入れて訪問先の建物や都市を見る時、今までと違ったものも見えてくるのではなかろうか。

②高齢社会の必要とする建物

建築設計副部長　小松正樹氏

高齢社会の問題はセミナーのテーマでもあり、身近かな問題でもある。二一世紀前半には四人に一人は六五歳以上の高齢者になる。この時の為に《高齢者になっても住める住宅》《介護し易い住宅》という観点から構造や建築材料への配慮が必要になる。家の内外の段差をなくし、床に滑り難い素材を使うというのもその一つ。新住宅推進委員会制作のビデオを視ながら具体的に説明をうけた。ひと昔前までは障害者の為に考えられていた気配りや補助器具が、ごく一般の住宅にも必要になってくる。又、将来私達もお世話になるかもしれない老人向けのケアハウスも、実際に動き易いというだけでなく、精神的にも実に細かく気配りして作られるのだということも解った。行き届いた施設の映像を見ながら、さぞ快適な生活だろうと思う反面、やはり我が家で一生元気で生活したいものだと強く思いもした。（佐藤睦子）

『ボランティア活動と高齢社会』

―ボランティア活動に関する会員の意識と実態調査―

東京支部では社会福祉委員会と共同で、本協会'93年度のセミナーに参加し、表記のテーマにそってアンケートを作成、ボランティア活動に関する会員の意識と実態調査を行った。他の委員会との共同参加は支部にとって初めてで、いろいろと勉強になり、大変いい体験になった。支部の中にセミナー委員会を設置し、一三名の委員が参加、約半年間にわたりアンケート調査、集計、分析、聞き取り調査等を行った。

目的　会員対象のアンケート調査を行い、ボランティア活動についての会員の意識および実態を調査し、本協会の今後の活動方針の基礎資料を得ると同時に、今後の高齢者福祉の問題を考える手がかりを得る為のものである。

調査手続き　'93年5月～6月、会員の約1／3に当たる八〇四名に調査用紙郵送。東京支部会員二〇三名には「高齢者に対するボランティアについての調査」の用紙を一枚追加した。その後問題をより深くほりさげるために、聞き取り調査を行った。対象は六名（会員五名、非会員一名）。

今回は紙面の都合もあり、東京支部会員のみを対象に行った「高齢者に対するボランティアについての調査」の結果について報告する。なお全体の結果については、すでに本部会報に概略が報告されており、セミナーの報告書にも詳しく掲載される予定である。東京支部の聞き取り調査の結果については、後日会員の皆さまに資料をお届けする予定なので、参考にしていただければ幸いである。

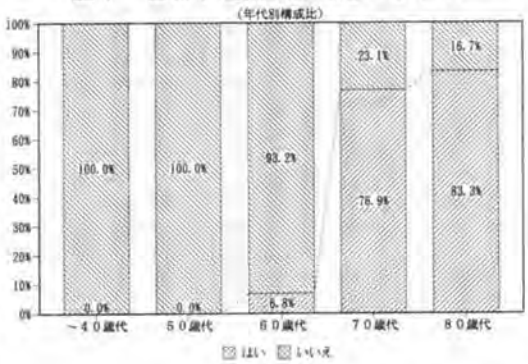
「高齢者に対するボランティアについての調査」結果と考察

調査数　東京支部会員　二〇三名
回収率　五八・六％　一一九名

回答者の年代別構成比は五〇歳代、六〇歳代が多くそれぞれ全体の約1／3を占めている。ついで四〇歳代七〇歳代が合わせて約1／3弱。八〇歳代は数％となっている。

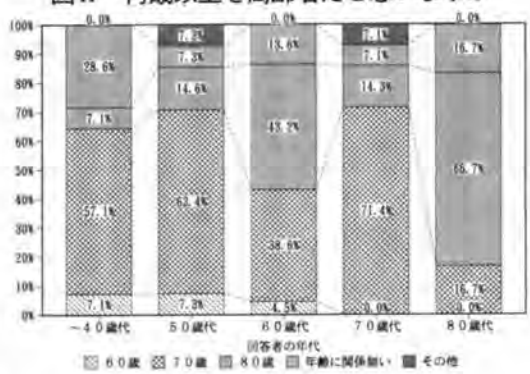
●まず高齢者といっても何歳以上を高齢者と考えるのか会員の意識を聞いてみた。自分自身を高齢者と思うかという問いに対する結果は図Ⅰの通りである。四〇歳代、五〇歳代は自分自身を高齢者だと思う人は無く、六〇歳代でも9割以上の人が高齢者だとは思っていないが七〇歳代では約七七％の人が、八〇歳代では約八三％の人が高齢者と思うようになる様子がわかる。ただし七〇歳代で二三％、八〇歳代でも一七％の人が高齢者と思っていない。これはこの会の特徴であろうか。

図Ⅰ　自分を高齢者だと思いますか



●次に何歳以上を高齢者と思うか、年代別にまとめたのが図Ⅱである。四〇歳代、五〇歳代では六〇歳代を高齢者とする人は極くわずかで、七〇歳代を高齢者とする人が多数をしめている。六〇歳代では近づく七〇歳代を高齢と認めたくないのか、七〇歳代を高齢者とする人はかえって少なくなっている。また年齢に関係ないとする人は四〇歳代、ついで八〇歳代に多くなっているのも、注目されるところかと思う。

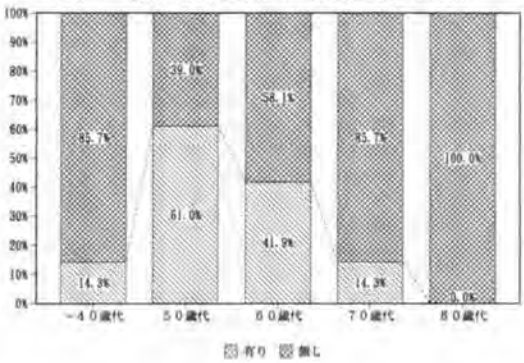
図Ⅱ　何歳以上を高齢者だと思いますか



●現在、家族の中に介護を必要とする高齢者がいるかどうかについては図Ⅲのとおりである。五〇歳代、六〇歳代で多く、七〇歳代でも一四％強の人がいると答えている。高齢者が高齢者の介護をしている実態がわかる。

●被介護者の回答者との関係をみると、姑と答えた人が約三八％、実

図Ⅲ　介護を必要とする高齢者の有無



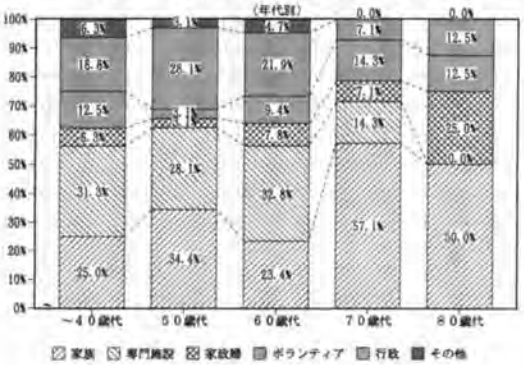
母と答えた人が約三八%とほぼ同数で断然多く、介護者は被介護者の何に当たるかその関係をみると、嫁と答えた人が約四九%、娘と答えた人が約四三%と群をぬいて多い。これはまさに高齢者問題が女性の問題であることを示している。

介護のためにボランティアの援助をうけている人は、約一七%である。まだまだ少ないのではないか。その援助の内容はデイケアーやショートステイ、家事援助などがあげられている。援助を受けない理由としては、必要を感じない、本人が嫌う、自分で出来る、気を使うなどがあげられている。また、ボランティアの存在を知らなかったという理由もわずかにあった。

●過去に高齢者の介護を経験している人は約六七%ある。やはり五〇歳代、六〇歳代が多くそれぞれ約七八%、七〇%である。八〇歳代は過去にさかのぼっても介護経験は少なく約二八%である。四〇歳代では五四%、この年代の多くは将来経験せざるをえない年代と思われる。介護のためにボランティアの援助を受けた人は約九%しかいなかった。そのなかで受けなかった理由としては、家族で世話をしたからという人が最も多く二八%で、存在を知らなかったという人も一五%いた。

●将来自分自身が介護が必要な状態になった時、だれに（どこに）頼みたいか、ときいた結果が図Ⅳである。七〇歳代では家族をあげた人が五七%と一番多く、八〇歳代でも五〇%と多くなっているのに対し、四〇歳代、五〇歳代、六〇歳代では専門施設をあげたひとが三〇%前後にのぼり、行政にたいして期待している人もかなり多い。今後家族のみに介護を期待できる状態ではないと、将来の高齢者予備軍は考えているのかもしれない。

図Ⅳ　将来介護を頼みたい人は



結び　当協会は高年齢、高学歴、有職者及び有職経験者が多い団体と思われる。これは高齢化、高学歴化が進む日本の将来の社会の姿をすでに映し出しているように感じられる。

国連では、六五歳以上を統計上高齢者としている。そして高齢者が全体の人口にしめる割合が七%をこえると、高齢者社会に入ったとしている。日本では二十一世紀はじめには、その割合が二五%に達する見込みなので、これは大変な問題であるといえよう。しかし、いうまでもなく高齢が問題なのではなく、それにともなういろいろな困った現象がわれわれを苦しめるのである。当会員はアンケートの結果でも、また聞き取り調査においても、高齢にもかかわらず、いろいろな場面で活躍されている方が多かった。高齢者自身が自立して生活することも大切な事であろう。またボランティアに関しても、かなり積極的な関心をもっている。今後、当協会の役割としては、これからの高齢者社会が必要としているボランティア活動への積極的な参画や、行政への提言は勿論のこと、各会員のボランティア活動に対する要望への橋渡し、情報提供等が考えられる。またボランティア精神の育成については幼少時からの教育が大切である。我々自身、そのおかれた立場で、今一歩積極的な努力、協力が必要かと思われる。

本アンケート、その他調査にご協力くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

★セミナー委員会
委員長　有本玲子
委員　有沢公　磯村明子　北村和子　駒木三枝子　鈴木光子　関口瑞穂　比留間淑乃　藤枝史子　溝渕ひろ子　峯川正子　山村敬子　吉田桂子
（文責　駒木　三枝子）

浴風会見学記

「しあわせな老後」という言葉ほど私達の興味をひくものはない。秋のセミナーにおいても、様々な角度からそれを追求し、研究してきた。昨年夏、約五十名の会員の方と共に老人福祉施設の先駆的役割を果たしてきた浴風会を見学する機会を得た。

浴風園は関東大震災で身寄りをなくした老人を収容し援護するという目的で設立されたのが始まりであるという。しかしながら昭和の初め、本人はもとより周囲も入所をためらう風潮が支配的で、入所するよう説得するのが困難だったと聞き、約七十年という年月を経た現在の世相と比べて、日本人の意識の変化には全く驚くばかりである。

見学に先立ち園長先生より老人福祉の問題点をお聴きする。入所希望者は、先ず地域の福祉事務所に申請し面接を受けて、入所が決定されるとの事。最近の傾向として、経済的理由より、家族の中で精神的に虐待を受けるなど環境的な理由で、一刻の猶予も許されない状態に置かれた老人が増えているとのこと。又幸い「養護老人ホーム」に入所できたとしても、その後いわゆる「寝たきり」になり、「特別養護老人ホーム」に移転しなければならない場合、園内に欠員がなく、外の施設へ移らざるを得ない方もあるとの事。以前は元気な入所者は草むしりなどの軽い労働に喜んで従事していたが、現在はそういう機会がなくなり、かえって昔を懐かしむ声が出ているとか。経済的見地からみても、大きな矛盾点が見つかるとのこと。せめて≪甘え≫をなくし、でき得る限り自分で自分を支えていこうという気概を持ちつづけて欲しい、との訴え。

職員の方々の御配慮により、施設の中をくまなく見学させて頂いた。手入れの行き届いた園内。清潔な居室。最新の入浴整備など。又ボランティアの指導による書道、俳句など二十にものぼる同好会とその見事な作品にも接することができた。

行政の手厚い保護と職員の方の暖かい介護、それに加えて、もし身内の方の度々の訪問が受けられるならば、理想的な老後がそこにはあった。ただ入所を希望する老人すべてがこの様な施設に入所できる時が到来してこそ、日本も本当の福祉国家の名に値する、という思いがした。

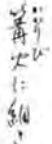
（有沢　公）

＜東京漫歩くらぶ＞ 小江戸川越

鎌倉時代は源頼朝の御家人河越太郎重頼の本貫地、又、江戸時代には江戸後背地の穀倉地帯を押さえる要衝として江戸との舟運で栄え、大老、老中等幕府の重臣や連枝が藩主であった川越。十一月十八日、参加三十名で蔵造りの残る町並を、野口敏子様ご紹介で浦和家裁調停員とし共にご活躍の清水様にご案内頂いた。

「どろぼう橋」を渡り喜多院へ、慈覚大師の再興で関東天台宗の中心となった古い歴史を持つ喜多院は、江戸初期家康の帰依厚い天海僧正を住持に迎え、川越大火で類焼後、家光より江戸城紅葉山御殿の寄進を受け、客殿、家光誕生の間、春日局化粧の間等初期江戸城の貴重な遺構を今に伝える。手入れの行届いた遠州流庭園は紅葉の彩りも美しく、五百羅漢は表情が変化に富み見飽きない。「東屋」で名物の鰻を賞味し、河越重頼墓所の養寿院に向う。菓子屋横丁では童心に帰り名物芋菓子を求め、荒物問屋としての蔵、トロッコレールの残る清水様のお宅でお茶とお団子をご馳走になり、私達の為に改めて川越の歴史を見直しご案内下さったご厚意に感謝し散会。（斉藤智恵）

諏訪の旅



十月十二日の朝、財務（委）主催のツアーの二台のバスは新宿を後に。大渋滞をやっと抜け、天候も回復した頃左手に相模湖が。笹子トンネルを抜けると葡萄畑や桃畑、遠くアルプス連峰がかすみ、八ガ岳、横岳がくっきりと映え、紅葉もちらほら。やがて諏訪湖が見え、やっとホテル紅やに到着。美しく盛られた信州の会席料理に皆大満足。一息入れて湖畔に瀟洒な佇まいを見せる北沢美術館へ。ここは十九世紀の華アール・ヌーヴォの工芸品と現代日本画を収集展示、ガレの≪ひとよ茸のランプ≫＝三層の色ガラスのグラヴィール等、ガレやドームの神秘的な美を究めた逸品が四百点以上も。二階では魁夷、松篁、郁夫、寧等の作品を鑑賞。次は≪ガラスの里≫。アール・デコの巨匠ラリックの繊細で幻想的な光の芸術に陶酔。既に四時過ぎ、最後に七年毎の御柱祭で高名な諏訪大社へ。老杉に囲まれた静かな境内で各々思いをこめて参拝、帰途に着いた。

（太刀川洋子）

他支部紹介

「地方支部より」

福井支部長　木村温美

一九七九年、会員の老齢化、新入者なしの状況に区切りをつけ、三名が残った。以来、交代者がないまま私が支部長として今日に至っている。その後、一時は二一名まで会員がふえ、本部主催のセミナーでも二年連続して報告を行ったが、昨年度末三名退会、現在一八名である。富山、福井両県に散在する為活動ができず、会費納入で貢献という、会費会員に徹した運営で来た。会員構成は一貫して他府県からの移住者、そしてフルタイム有職者が殆ど、地元出身者は大学別の同窓会には出てもこちらへは入会が少ない。

'95年の国際会議までは何とか支部として存続しましょうという了解のもとにあるが、どうも一支部だけの問題ではなく、JAUW、あるいはIFUWともに再検討の時機が来ているように思われる。女性の大卒者が極めて少数の時代に掲げた目的や活動方法は、多数、多様な大卒者の溢れる今日、特に若・壮年層へのアピールに向け脱皮する必要を感じる。

版画講座

美術の秋にふさわしく、アダチ版画研究所社長中山吉秋氏から二回にわたり木版画についてお話を聞いた。

初期の浮世絵から現代に至る沢山の木版画を実際に手にとり、暖かい和紙の手触り、本当に木を彫って刷られたものかと驚く線の美しさ、あざやかな絵の具の色に目をみはった。

日本では、外国で評価されたもの、作家の一品物をよしとする風潮が未だにあるが、同じものを均一に作り出す職人の技をもっと評価して欲しいと話され、日本が誇る木版技術の保存に努力されている熱意が伝わってくる講座であった。

第一回　木版画の歴史について

木版画の歴史は浮世絵の歴史であるが、浮世絵は本来、版元が絵師、彫師、摺師を使って情報を売る手段で、美術品ではなかった。初期の浮世絵版画は、墨一色で吉原や町人の風俗を描いていたが、歌舞伎の隆盛に伴い役者絵が現れた。鳥居清信が歌舞伎との密接な関係を作ってから、役者絵、看板絵、絵番付など歌舞伎に関する一切を取り仕切るようになり、鳥居派として今日まで続き、江戸の荒事の表現に、ひょうたん足にみみず書という描法が考案され踏襲されている。また、歌舞伎の華やかさを表現する為に筆で彩色するようになったが、「見当」という鈎印を木版につける工夫がされ、多色刷が可能になった。

明和二年、鈴木春信の描く美人画は錦のように美しく「錦絵」とよばれ庶民にもてはやされた。当時の色彩に乏しい庶民生活の中で、色あざやかな美人画や役者絵が、いかにもてはやされたか想像できる。

天明の頃、浮世絵は黄金期を迎え、鳥居清長の描く八頭身美人の情緒的な絵は衣装も最先端をゆく華やかさでもてはやされた。

清長の影響を受けた喜多川歌麿は蔦屋重三郎という版元で育てられ、顔だけ大きく描いたいわゆる雲母摺大首絵の美人画で大人気を得た。しかし、多くの版元の依頼に応じて濫作に陥り人気も衰えていった。

歌麿考案の大首絵を役者絵に利用したのが東洲斎写楽である。彼は寛政六年から翌年二月迄の僅か十箇月間に約百四十枚の絵を描いたが、最初の二八枚の大首絵の後は画法も変わり絵も小さくなった。海外で評価の高い写楽の作品も大首絵である。

ここまでの浮世絵は役者絵、美人画であくまで人間を描いてきたが、葛飾北斎が描いた富嶽三六景が大好評で、風景画が庶民に定着した。当時の富士講の流行が背景にあった。後に北斎の絵はうるさく難解なものとなり飽きられていく。そこへ穏やかで情緒的な絵を描く安藤広重が登場した。物見遊山が流行し人の往来が盛んになった時代にマッチした絵を描いた広重は、生涯、人気絵師であったが、貧しい職人で、現存の遺言状には家を処分して借金を整理してくれなどと書かれている。

明治になり、写真や他の印刷技術の発達に伴い、浮世絵版画は本来の働きを失っていった。

第二回　現代版画技術について

現代版画の多様な版式の説明と作品を拝見した後、摺師さんが広重の東都名所日本橋雪中の図を刷るのを見学。墨一色の輪郭に色が加わるに従って橋の上を急ぎ足に往く人、白く雪を冠った富士山、そして降りしきる雪があざやかに刷り上がり、感嘆の声があがった。

（吉田桂子）

東京支部新入会員

(1993年12月現在)

氏名	出身校	住所	氏名	出身校	住所
高橋佐和子	カリフォルニア州ハンボルト州立大		桐田久和子	大阪	
堀口悦子	明治		丹波菊井	東女	
桜木さとみ	青学		若林裕子	日女	
広田紀子	早		鈴木照子	津	
篠原てる	東電大		足立有子	日女	
宮崎黎子	早		伊藤偕子	日女	
奥村礼子	慶		佐倉知子	日女	
小松美枝	一橋		藤田亜紀子	上智	
斉藤郁子	東女・院		松井菊子	早	
鳥谷和子	明治		三富節子	日女	
三浦由紀子	茶		若月佐和子	白百合	
山口恵理子	昭女		佐久間慶子	茶・東京院	
吉村順子	慶		澤西三貴子	関西・神戸院・ハーバード院	
今津温子	慶		縄田真紀子	奈女	
武見ゆかり	女栄・院		加納のり子	津	
清水順	聖・コロンビア大・院		川橋典子	武蔵美	
関口静子	早		菊池薫	聖・上智院	
山崎史乃	聖心		工藤真由美	津	
吉野明美	聖心		堀口裕子	実	
リニー・モーガン	ミシガン大・デンバー大		正木由美子	明学	
遠藤美穂子	上智		荒川美奈	関学	
高木加奈子	上智		細田明子	新潟	

行事報告

7月1日　「ともしび」14号発行
22日　老人医療施設浴風園見学
9月25日～　JAUWセミナー　テーマ「改めて高齢者問題を考える」
10月6日～26日　幕張メッセ　浮世絵講座「木版画の世界」一回目〝浮世絵から現代に至るまで〟
27日　二回目〝木版画のできるまで〟　講師　中山吉秋氏
10月12日　諏訪の旅（財務委主催）
11月12日　第四回漫歩くらぶ　小江戸　川越見学
18日　新春の集い（本部主催）
1月22日　国内奨学金贈呈式（国内奨学委、社会福祉委と共催）
29日

編集後記

東西ドイツ統一の陰の「ヨーロッパピクニック計画」。中東湾岸戦争のさなか当事者の必死の歩み寄り。ユダヤとカソリック教会も二千年の長きに亘る対立から和解の道も歩き始めたと言う。激動する世界の流れに日本のみ例外ではない。私達一人ひとりの願いに明日が託されていると実感しつつ、新しい年を迎えた。（A）

四号から編集に加わり、いろんな意味で啓発されることが多かったし、様々にお世話になった。新年度からやっとお役御免で、一読者としてともしびを眺める幸に浴する。

思えばタイトルの字体変更に始って東京大会記念号の編集など、さまざまな事件？があった。特にこの二年、若井様がリタイアされたため、皆で責任分担して編集に当ってきたが、とにかく皆様に感謝したい。

来号からの新鮮味溢れる誌面に御期待下さい。（T）

ともしび　十五号　発行日　一九九四年二月一日　発行　大学婦人協会東京支部
〒160 新宿区新宿七―十七―十八戸山マンション二四一号　Tel〇三―三二〇二―〇五七二　印刷　タナカ印刷㈱